學界動靜

アルタイ學の現狀

村山七郎

ここに「アルタイ學の現狀」という表題をかかげたが、以下にのべるところは讀者が表題から期待するものとはおそらくかけはなれたものであろうことを豫めおことわりしておきたい。アルタイ學の現狀をつたえようと志向するが、ここに述べるものは筆者の目に映じたそれである。筆者はこの分野における國際諸學者の業績に全面的に目を通しているわけでないので、きわめて不滿足なアルタイ學現狀像しか提供しえないことにたいし讀者の御寬恕を請う次第である。

いったいアルタイ學とはなにか。ひろい意味ではアルタイ諸民族の言語・歷史・民族學的研究をふくむが、狹い意味ではアルタイ諸民族の言語の研究をさし、もっとも狹い意味ではアルタイ諸言語の相互關係を研究する學問、つまりアルタイ比較言語學のことである。ちょうど、ゲルマン學（ドイツ語 Germanistik）やスラヴ學（ドイツ語 Slawistik）が廣い意味ではゲルマン系ないしスラヴ系諸民族の言語・歷史・民族學的研究をさし、狹い意味ではそれらの言語の研究をさし、もっとも狹い意味ではゲルマン系ないしスラヴ系諸言語の相互關係、系統的諸關係の研究、つまりゲルマン比較言語學、スラヴ比較言語學をさすのと似ている。ただし、一方では最も狹い意味のアルタイ學と他方ではゲルマン學、スラヴ學とのあいだにひとつの、かなり大きいちがいがある。それは、後者においてはゲルマンないしスラヴ諸言語間の親族關係が證明され確立されているのにたいして、前者においてはアルタイ諸言語間の親族關係はいま證明途上にあり、それにたいする否定的な見解をとる學者（アンチアルタイスト）もいるということである。

ここで述べる「アルタイ學」は最も狹い意味のそれではなく、狹い意味のそれをさすことにする。

アルタイ系言語とはなにをさすか。フィンランドの生んだアルタイストG・J・ラムステット（一八七三―一九五〇。名前自體は北ドイツ語で「烏・町」を意味する）は、はじめモンゴル語、トルコ語（ついでながらチュルク語と書く人もあるが、こう書くとこの民族名の頭音がCであるような誤解をひきおこすおそれがあってまずい。從來のようにトルコと呼んで非常に不都合な事態がうまれるわけでない。ソ連ではトルコ語一般を Тюркский язык と呼び、トルコ共和國のトルコ語を Турецкий язык と呼んでいる。後者はトルコ共和國をロシア語で Турция と呼ぶことから來ている。）、滿洲・ツングース語をアルタイ系言語のうちにふくめていたが、後に朝鮮語をもそれに含めるにいたった。氏は Mémoires de la Société Finno-Ougrienne LVIII (1928)に發表したRemarks on the Korean Language においてはじめて「朝鮮語はアルタイ系言語の枝」という說を提出した。ついでながら同じ說を最初に提出したのはソ連の異才E・D・ポリヴーノフ（一八九一―一九三八）であった。氏は一九二七年「朝鮮語と『アルタイ』諸語との親族關係の問題につい

て」(Известия Академии наук СССР, серия VI, т. XXI, No. 15—17, Ленинград 1927, pp. 1195—1204 この論文は一九六八年モスクワ刊の『ポリワーノフ一般言語學論集』に採錄されている。一五六—一六四ページ)において朝鮮語とアルタイ系諸言語とのあいだに親族關係のあることを論じた。論證のしかたは翌年發表されたラムステットの論文のそれに甚だ近い。ついでながらポリワーノフは同じ年にトルクメン語とヤクート語の資料にもとづいて、原始トルコ語に長母音が存在したとする說を提出し、これは後に一連の學者による檢討をへて定說となった。ポリワーノフとラムステットは朝鮮語の系統について獨立に、同じような說に到達したのである(二人の學者が獨立に同じ說を提出するということは學界において稀なことではない。わが國では「有坂(秀世)法則」なるもとに知られているいわゆる古代日本語の音節結合の法則(一種の母音調和の法則)が池上禎造氏によって「國語・國文」第二卷第十號、一九三二年に、有坂秀世によって「國語と國文學」、同年十一月號に發表された。兩論文の內容が酷似しているのは驚くほどである。この法則に有坂の名だけを冠するのは不公平である)。

朝鮮語をアルタイ系言語に加える考えは次第に有力となりつつある。ここでもアルタイ諸語というときラムステットに從って、朝鮮語をふくめることにする。

現在アルタイ系言語と言えば、このようにトルコ、モンゴル、滿洲・ツングース及び朝鮮語の四グループの言語があげられるが、それらの親族關係が證明濟みというわけでなく、英國のクローゾン卿、ドイツのベンツィング氏、ドェルファー氏、アメリカのシノール氏、ソ連のシチェルバク氏らはそれを否定している。それにもかかわらずそれらは「アルタイ系諸言語」(Altaic languages)と呼ばれるのがふつうである。そこで、「アルタイ系諸言語」というばあい、その呼稱がまだ條件的であることを忘れてはならない。

これらの言語の研究が各國において現在、どのような狀況にあるかを詳しく說明することは筆者の意圖でない。筆者の目にふれたところを以下しるすにとどまる。

トルコ語研究

ユネスコの援助のもとに刊行された Philologiae Turcicae Fundamenta(トルコ・フィロロジーの基礎)第一卷言語編(ウィースバーデン、F・シュタイナー書店 一九五九)、第二卷文學編(一九六四)(第三卷歷史編は未刊)が刊行されて以來の目ぼしい業績としてソ連科學アカデミー言語學研究所が刊行した古代トルコ語辭典 Древнетюркский Словарь をあげなければならない。編者はV・M・ナデリャーエフ(何の學位、稱號も持たないがその實力はソ連トルコ學者の中でもきわだっていると言われる。非常にけんそんな學者)、D・M・ナシーロフ(有名なトルコ學者、バッハ音樂の愛好家故V・M・ナシーロフの甥)、E・R・テニシェフ、A・M・シチェルバク氏。一九六五年初夏筆者が言語學研究所を訪れたとき、同辭典の編さんが進行中であった。約二萬語をふくむこの辭典は古代トルコ語の研究にとって不可缺の文獻となった。それまではフォン・ガベン先生の『古代トルコ文法』付錄の語彙やS・A・マーロフの『古代トルコ語文集』の付錄語彙にたよっていたのである。

フィンランドのM・レセネン氏(『トルコ語音韻史資料』『トルコ

語形態論資料』の著者）の『トルコ語語源辭典習作』（Martti Räsänen. Versuch eines etymologischen Wörterbuches der Türksprachen. Helsinki 1969）が出版された。この表題は、ラドロフの『トルコ方言辭典習作』（Versuch eines Wörterbuches der Türk-Dialecte）を想い出させる。この辭典については、江上波夫、山田信夫氏及び筆者も參加した第九回國際常設アルタイ會議（PIAC、イタリー、ラヴェロ　一九六六年）においてレセネン氏が豫備報告を行なっていた。これは世界最初のトルコ語源辭典である。ラドロフのトルコ方言辭典を土臺とするこの辭典は五三三ページに及ぶもので、トルコ諸方言の語形を比較し、モンゴル語、ツングース語その他の言語の語形との比較を行ない、また借用語についてはそのもとの語形を明示している。最初の辭典だけに、完全とは言いがたい。ドイツのトルコ學者バングの流れをくむ學派はトルコ語語構成を徹底的に究明するが、その立場から見たならば、レセネン氏のこの辭典は不徹底と見えるであろう。またたとえば密接な關連が疑われないトルコ諸語 täbä～tebä～teve～täviä～täviー～tivi「らくだ」とモンゴル語の teme・gen「らくだ」とは單に並記されるだけであり、兩者が借用關係に立つのかそれとも共通祖語からの共同遺產であるかという點についてはレセネン氏の見解が示されないのは物足りない感じをぬぐい切れない（筆者の考えでは、この例では、東部トルコ語 täviä が西部モンゴル語に借用されたとき、母音間の v が m に變化した）。

さいきん、クローゾン卿のトルコ語語源辭典も出版されたようであるが未見。ソ連のセウォルチャン氏（一九七一年夏古稀の祝いをした）のトルコ語語源辭典の編さんも進行中であり、トルコ共和國でもおなじ仕事が進められているようであり、さらにベンツィング氏（現在、マインツ大學）とカリフォルニアのティーツェ氏とが共同で語源辭典を準備していることをイスタンブールでベンツィング氏から聞いたのは十年前のことである。トルコ語語源辭典はモンゴル語、ツングース語の研究にとっても大きな意義をもつ。他方、それらが、たとえばファスマー先生の『ロシア語語源辭典』（ハイデルベルグ一九五三―五八）の水準に達するのは相當先のことであろう。

『古代トルコ語辭典』の編者のひとりA・M・シチェルバク氏――ソ連の若い世代のトルコ學者――の『トルコ諸語比較音韻論』（レニングラード　一九七〇）はトルコ語音韻研究史に輝やくラドロフの劃期的な『北方トルコ諸語音韻論』（Phonetik der nördlichen Türksprachen. Leipzig 1883）以來の諸學者の研究を總括し、新たにトルコ語音韻を體系化しようとしたもので、トルコ學にとって近來の大きな收穫である。

ソ連のバクーのアゼルバイジャン共和國科學アカデミーが「ソヴィエト・トルコ學」（Советская Тюркология）という隔月刊行の新しいトルコ學雜誌を一九七一年から發行しはじめたことも大きな出來ごとである。ソ連一流のトルコ學者の編集のもとに刊行されているこの雜誌の內容は言語學關係のものが壓倒的である。一九七二年第一號はマフムド・カシュガリ特集號で、『トルコ語辭典』（Divān lugat at-türk）編ゃん九百年記念ソ連トルコ學會議――一九七一年十月上旬、フェルガナ市――のさいの發表を集めたものである。コーノノフ氏（科學アカデミー準會員）がトルコ學にたいする彼の貢獻を論じた中で、同辭典に付した民族分布圖中のチャパル

カ（ヂャバルカ）を「日本」としているのは明らかに誤りである。

古代トルコ語の研究ではG・アイダーロフの『八世紀古代トルコ語のオルホン碑文の言語』（Язык орхонских памятников древнетюркской письменности VIII века）（アルマアタ　一九七一）がある。突厥碑文研究の新文獻のひとつとして看過できない。ただ三六七―三七七ページの文獻目錄、三七八ページの文獻略號說明のうち、英獨佛語にかんするものには多くの誤植が見られるのは殘念である。文獻目錄にはタリャト・テキンの『オルホン・トルコ語文法』（A grammar of Orkhon Turkic, Bloomington 1968）がもれている。

一九六八年六月中旬、レニングラードでラドロフ（一八三七―一九一八）追憶記念集會があったときの發表を集めたものが『トルコ學論集一九七一年』（Тюркологический сборник 1971）としてさいきん發行された（モスクワ　一九七二）。ラドロフ著作目錄、ラドロフ關係文獻目錄（二六一―二七七ページ）をふくみ、羽田亨についてふれている個所がある。

イランのトルコ語、ハラジ語（Khalaj）についてゲッチンゲンのドェルファー氏は精力的な研究を行ない、一九六九年には自ら第二回探檢に參加した。氏はハラジ語は母音の長さ（短、トーンの變らない長、トーンの變る長）、語頭に h-（*p- にさかのぼる）がある點、形態論上の諸特徴によって、原始トルコ語のおもかげを保存し、トルコ諸方言の中で地位を占めるとしている。氏のハラジ語研究關係論文は、ZDMG 一八一―一、Current trends in linguistics, VI ソ連の「言語學諸問題」誌一九七一年一號、などに發表され、また H. Scheinhardt, S. Tezcan との共著 Khalaj materials はインディアナ大學の Uralic and Altaic series, 115 として發表されている。

ドェルファー氏の見解は各國のトルコ學者、アルタイ學者の檢討をうけつつあるようである。

モンゴル語研究

Čos-kyi 'Od-zer の手に成るチベット語オリジナル（未發見）からのモンゴル語譯「佛陀の十二の行ない」の英譯、注、研究がN・ポッペ氏によって發表された。ボンのハイシュ氏の編集する『アジア研究叢書』第二十三卷をなす The twelve deeds of Buddha. A mongolian version of the Lalitavistara. Mongolian text, and English translation by Nicholas Poppe. (Wiesbaden 1967) がそれである。初期モンゴル文語の研究にとって重要な貢獻である。氏がかつて學び、敎えたレニングラード國立大學へのロシア語獻呈辭を卷頭に付しているのは、印象的である。原典はレニングラード大學東洋學部圖書館藏の珍らしい寫本である。もうひとつの寫本はウランバートルにもあり、そのフォトコピーはインドのラグヴィラ氏に贈られた。ワイアース氏による書評が Journal of the American Oriental Society, 89. 1 (1969) に發表された。

初期のモンゴル文語と言えば、ボンのM・ワイアース氏（最近ボン大學の敎授になった）はいわゆる古典期以前のモンゴル語の大部分を調査して『先古典期モンゴル文語歷史文法研究』（Untersuchungen zu einer historischen Grammatik des präklassischen Schriftmongolisch (Wiesbaden 1969) を出した。ふつう、モンゴル文語というばあいは、ウイグル字で書かれたモンゴル記錄をさすが、

ワイアース氏は、そのほか、漢字で書かれたモンゴル語記錄（元朝祕史、華夷譯語）、パスパ字モンゴル語記錄をもふくめている（筆者による書評は「言語研究」誌五九號に出ている）。

ハンガリーではリーゲティ氏によって、モンゴル語記錄集（Monumenta Linguae Mongolicae Collecta）のⅠ「モンゴル祕史」（一九七一）（緒言、序文、ローマ字轉寫）、Ⅱ「先古典期記錄Ⅰ、十三、十四世紀」（一九七二）、Ⅲ「パスパ字記錄」（一九七二）が刊行され、それと並行して、右のⅡの語彙索引二冊（一九七〇、一九七二）も刊行された。數年後に中期モンゴル語辭典（フランス語譯付き）を出版する豫定という。中期モンゴル語研究に對するハンガリー學者の熱意は大きい。リーゲティ氏の「モンゴル祕史」轉寫の序文は興味がある。氏は漢字音譯の直接の土臺となったものがウイグル寫本であること（われわれが以前から主張してきたのもそれとおなじ）をさまざまの根據から證明している。

おなじリーゲティ氏の編さんした Mongolian Studies（一九七〇、五九〇ページ）は「第二回モンゴリスト國際大會とそれを組織したモンゴル科學アカデミー及びモンゴル學者に捧ぐ」と獻呈辭のついたもので、各國の學者の手に成る論文三十三篇を集めたものである。この論集は重要な論文をふくみ、モンゴル語の研究家にとって不可缺のものである。日本からは服部四郎氏の The Length of Vowels in Proto-Mongol（原始モンゴル語の母音の長さ）と筆者の「モンゴル語における本源的長母音の理論の發展」（ドイツ文）とが掲載されている。前者は第一回モンゴリスト國際大會（ウランバートル　一九五九年）において發表したものが誤植があるので再度發表したという。氏は「言語研究」（三六號、一九五九年）に、注をつけて日本語譯を發表している。その說のうち、モンゴル文語發生段階にかんする部分（母音間b、gが弱まって、その差がなくなった段階で文語が發生したとなす部分）はラムステットの「モンゴル語の唇摩擦音の歷史について」（V・トムセン古稀記念論集、ライプチヒ　一九一二年）の說と論旨がほぼ一致してる。筆者の寄稿は元朝祕史のモンゴル語を表わす漢字で、從來 do（dö）を表わすと見られた朶と多のうち、朶は dō（dö）、多は do（dö）を表わすこと、十四世紀の東モンゴル語において非派生的な長母音が部分的に保存されていたことを取りあつかったものである。

前出のボンのワイアース氏が、戰後、數度アフガニスタンに旅行し、モゴール語にかんする資料をかなり集め、その研究をボン大學中央アジア言語文化研究所の機關誌 Zentralasiatische Studien に發表し、モゴール語にかんするモノグラフを準備しつつあることもあげなければならない。氏によれば、モゴール語はモンゴル語における非派生的長母音の存在の證明を提供しない、という。

ニコライ・ポッペ氏（前レニングラード大學、戰後はシアトルのワシントン大學、現在は退職したが大學の研究會に出席して後進の指導に當っている、という）が、ソ連を去ってからソ連のモンゴル學はサンジェーフ氏（モスクワの東洋學研究所）、ベルタガーエフ氏（モスクワの言語學研究所）、トダーエワ女史らによって代表されている。前の二人はブリヤート・モンゴル人であり、トダーエワ女史はカルミュク人である。かつて、ウラヂーミルツォフ、ポッペ氏のようなロシア人がモンゴル語研究の指導者であったが、現在はロシア人のモンゴル語研究者で有力な學者は少ないようである。最近（一九七一年）T・A・ベルタガーエフ氏は『單語結合と現代タ

ーミノロジー、モンゴル語を材料として』（モスクワ　一九七一）という一般言語學的な性質をもおびた小著を發表している。

モンゴル語の研究はリーゲティ氏を中心とするハンガリー學派（ローナ・タシ、カラ、ベーシェ氏ら）、ポッペ氏を頂點とするアメリカ學派（クリューガー、J・ストリート、S・マーチンら）、ハイシヒ氏を中心とするボン學派（ワイアース、サガスター氏ら、西ドイツではさらに、ゲッチンゲン大學文學部の數年前に開設されたトルコ學・アルタイ學講座のドェルファー氏がいる）が國際的に活動している。フランスでは生成文法の立場からモンゴル語を研究する若いモンゴリスト・グループがいる。

ハンガリーの學者はモンゴル人民共和國の學者とのあいだの交渉が密接で、モンゴル共和國への旅行が容易であり、方言學的研究もかなり多く發表されているのが注目される（西ドイツのモンゴリストではわずかにワイアース氏がモゴール語の現地調査を行なっているにすぎない）。

ツングース語研究

最も多くツングース系種族を擁するのはソ連であるから、ソ連においてツングース語の研究が盛んであるのは當然である。レニングラード時代のポッペ教授の教え子で『ツングース・滿洲諸語比較音韻論』（レニングラード　一九四九年）の著者V・I・ツィンツィウス女史は今なお健在である。ツングース系言語の最も詳しいすぐれた文法はV・A・アヴローリン氏の手に成るナナイ語文法Ⅰ（一九五九）　Ⅱ（一九六一）である。有力な北方ツングース語であるエヴェンキの辭典（エヴェンキ・ロシア辭典、モスクワ　一九五八）の著者G・M・ワシレーウィチ女史、南ツングース語、ナナイ語の辭典（ナナイ・ロシア辭典）の著書T・I・ペトロワ女史の業績はきわめて高く評價されている。ソ連のツングース言語學者に女性が多いことは注目されるところであるが、その中にあって男性の研究者としてすぐれているのは前記のアヴローリン氏とレニングラードの言語學研究所アルタイ部長O・P・スーニク氏である。スーニク氏には「ツングース滿洲諸語の動詞」（レニングラード　一九六二）というすぐれたモノグラフがあり、比較的・歴史的（通時論的）立場からツングース諸語の動詞活用の諸形式の成立・發展を究明しようとしている。氏の說には大膽な假說も少なからず含まれていると見られるが、鋭い洞察力の所有者である。

ツィンツィウス女史をはじめ、ソ連のツングース語研究家の中にはN・ポッペ氏の弟子が少なくないようである。というのは、ソ連の――またドイツやアメリカの――ツングース語研究にとって、ポッペ氏の『ツングース語研究資料。バルグジン方言』（レニングラード　一九二七）、とくに『ソロン語資料』（レニングラード　一九三一年）は劃期的な意義を持っていたからである。

ツングース語研究にたいして大きな刺激を與えたのは比較的・歴史的（通時論的）立場に立つK・H・メンゲス氏（コロンビア大學）の論文 The function and origin of the Tungus tense in -ra and some related questions of Tungus Grammar. Language, No. 19 (1943) である。ツィンツィウス女史の前記比較音韻論とメンゲス氏のこの論文に刺激されてJ・ベンツィング氏は音韻論、形態論、シンタクスにわたるツングース比較文法（Die tungusischen Sprachen. Versuch einer vergleichenden Grammatik. Wiesbaden

1955) を發表した。これはソ連をはじめ各國のツングース語研究者たちの注目をひいた。そして氏のライバルであるメンゲス氏は『ツングース諸語』(Die tungusischen Sprachen. Handbuch der Orientalistik, Bd. V. Altaistik, Absch. III. Tungusologie. Leiden/Köln 1968) を發表した。これは總論とエヴェンキ、ラムート、ウデヘ、ナナイ語、女眞語とに分れ、とくに動詞活用の通時論的研究においてきわめて興味ある見解を展開している。ツングース形態論におけるメンゲス氏(ベルリンでトルコ學、スラヴ學を學んだ氏は當代まれに見るほどの驚くべきポリグロットであり、該博な言語知識は有名である)の功績は明白であり、アメリカにおいて氏が「ツングース言語學への貢獻」によってさいきん學術賞を授與された(J・ラーダー氏よりの私信による)というのも當然である。

しかしツングース諸語の比較形態論はまだ十分に究明されてはいず、この方面における新たな研究が期待されている。

朝鮮語研究

筆者は朝鮮語について書く資格はないが日頃考えていることを簡單にのべて見たい。さきに見たように朝鮮語をアルタイ系言語と見る說は一九二七年にポリワーノフによって、一九二八年ラムステットによって提出され、この考えはN・ポッペ氏によってうけつがれ(「朝鮮語が少なくともアルタイ的基層をもつことは確かである」N. Poppe. Vergleichende Grammatik der altaischen Sprachen, Wiesbaden 1960, p. 6)、筆者の畏友李基文氏(ソウル大學)はこの說をうけついでいる。氏は『國語史概說』(ソウル 一九六一、一八ページ)において次のような圖式を示している。

アルタイ共通語
夫餘・韓共通語
夫餘共通語　韓共通語
北方系諸語　南方系諸語

ここに北方系諸語というのは高句麗語その他をさし、南方系諸語とは新羅語その他をさす。ついでながらこの本の改訂再版が一九七二年九月ころに出版される豫定であり、そのドイツ語譯がルール大學東アジア學部によって行なわれる豫定である。李崇寧氏の「中世國語文法」(ソウル 一九六一)はドイツの讀者には專門的すぎるという理由で、ドイツ譯計畫に入っていない(B・レウィーン氏の私信)。朝鮮語はたしかにツングース諸語とのあいだに系統的關係を推定される。それは次の二例からでもわかる。

朝鮮語	dʒap-<*dʒapa- 取る，握る
滿洲語	dʒafa-<*dʒapa- 握る
ナナイ語	dʒapa- 取る，つかまえる
エヴエンキ	dʒawa-<*dʒapa つかまえる

朝鮮語	pïs-<*püsü- 注ぐ
滿洲語	fusu-<*püsü- 水をまく
ナナイ語	piśu- 水をかける (Grube による)
オルチャ語	pisiūri<*püsü- 水をかける

問題は共通動詞ステムの存在を音韻法則にてらしてあきらかにするにとどまらずこれらのステムの活用形態の一致を證明することである。李基文氏の研究 (A comparative study of Manchu and Korean. Ural-Altaische Jahrbücher, Bd. XXXX. Heft 1—2, 1958) も、現在のところではラムステットのばあいとおなじく、この點を十分に證明するところまでは

進んでいない。

韓國のアルタイストとしては李基文氏が最もすぐれた仕事をしているが、數年前、ゲッチンゲン大學文學部でドェルファー教授のもとで滿洲語の研究で Ph. D. となった李喜雨氏（ひきつづきゲッチンゲンにとどまっている）の學位論文を筆者はまだ見ていない。李喜雨氏も今後アルタイストとして進出するとおもう。ポッペ氏の流れをくむ李基文氏の活動は可なりよく知られているが、ポッペ氏にたいしてことごとに對抗意識をもつドェルファー氏の流れをくむ李喜雨氏が今後の韓國學界においてどのような活動をするか興味があるとおもう。氏は李基文氏に學んだという。

アルタイ學的な視野から離れてはいるが（だからと言って著者自身決してアルタイ學に通じていないわけではないが）ルール大學（西ドイツボーフム市）東アジア學部のB・レウィーン教授の手になる「朝鮮語動詞形態論」(Morphologie des koreanischen Verbs. Wiesbaden 1970) は朝鮮語の最も困難な問題と本格的にとり組んだ研究である。氏は朝鮮語動詞の對遇法に關する論文（Der interpersonale Bezug im Koreanischen. Acta Orientalia Neerlandica. Leiden 1971）も發表し、ラムステット以後の最もすぐれた朝鮮語研究家であることを實證している（レウィーン氏は本來日本語研究家として知られ、日本語關係の一連の著述は有名である）。氏は Dr. Kwon（權）Hyogmyon——ルール大學の朝鮮語の講師。ミュンヘン大學の Ph. D. ——の協力のもとに朝鮮語の研究をすすめている。ついでながら權氏の學位論文は Das koreanische Verbum verglichen mit dem altaischen und japanischen Verbum. Zur Typologie des Koreanischen. 1962 である。

朝鮮語を第一に日本語と、そして副次的にアルタイ諸語と比較研究しようとする試みは權氏につづいてS・マーチン氏（現在、イェール大學言語學教授）によって發表された（Samuel E. Martin. Lexical evidence relating Korean to Japanese. Language, 42—2 1966）。アメリカのこの才氣煥發の學者は三二〇の朝鮮語單語を日本語と比較している。アストン、金澤庄三郎（『日韓兩國語同系論』東京一九一〇年）、大野晋氏（『日本語の起源』東京　一九五七年。ついでながらその英譯本—國際文化振興會　一九七〇年—に對する鋭い批評がR・ミラー氏によってさいきん發表された Monumenta Nipponica, 26, 1971）によるこころみは、日・朝兩語の親族關係を證明するところまでは行っていない。マーチン氏の所說についても、同じことを言わなければならない。マーチン氏の研究についてR・ミラー氏の批評が發表されている（Roy Andrew Miller. Old Japanese phonology and Korean-Japanese relationship. Language, 43—1, 1967）。日本や韓國の學者がマーチン論文にたいして批評を發表しないのは殘念である。

アルタイ比較言語學

もっとも狹い意味のアルタイ學というのは、アルタイ系諸言語の相互關係の研究、つまりアルタイ比較言語學をさす。ところで、アルタイ諸語の親族關係はまだ證明ずみでないから、嚴密には「アルタイ系諸語」という用語も條件的なものであることはすでにのべた。それでは、アルタイ系諸語というのは、類型學的なパラレルを示す諸言語をさしているのであろうか。それは單なる類型學的な概念であろうか。長い歷史の過程において隣接のために生じた廣い借

用關係によってアルタイ諸語の共通性は生まれたのか。アルタイ言語の親族關係を想定する學者をアルタイスト、隣接による廣範な借用によって成立した關係と見る學者をアンチ・アルタイストと稱する。クローゾン卿（ロンドン）、シノール氏（インディアナ大學）、シチェルバク氏（レニングラード、言語學研究所）、ベンツィング氏（マインツ、大學イスラム學教授）、ドェルファー氏（ゲッチンゲン大學）はアンチ・アルタイストである（後述のスーニク編著、二三、二四ページにアンチアルタイストの關係文獻があげてある）。アルタイストの代表は現代においてはポッペ氏（シアトル）である。リーゲティ氏（ブダペスト）は明白なアルタイストとは言えないかもしれないが、中間派よりはアルタイスト寄りである。ソ連においてはアルタイ諸語研究家たちの態度は一時曖昧であったが、最近はだいたいにおいてアルタイストの立場が有力となっているとみとめられる。それは、一九七一年レニングラードにおいてO・P・スーニク氏編集のもとに出版された論文集「アルタイ諸言語の共通起源の問題」(Проблема общности алтайских языков) において多くの論者がアルタイストの立場をとっていることから知られる。この論集は一九六九年五月レニングラードで開かれた第一回アルタイ會議における發表に手を加えたものである。とくに編者スーニク氏は熱心なアルタイストのように見受けられる。ただしスーニク氏らも印歐比較文法が印歐諸語の親族關係を證明するために提出するような說得力あるデータを十分に提出しているわけではない。アルタイ諸語の名詞變化の形式や動詞活用の形式の實質的一致を證明することはまだ十分に成功していない。ついでながらアルタイ諸語動詞比較研究では依然としてラムステットの「ハルハ・モンゴル語活用」（一九〇三）と「モンゴル・トルコ語動詞幹形成論」（一九一二）がもっとも光っている。

アンチアルタイストが、アルタイ諸語共通要素を長期の隣接による借用で說明しつつも、各々のアルタイ系言語の祖形の母音體系を再構するとき同一となってしまう點、復元された子音體系もほぼ同一になる、というのはどうしたことであろう。この同一性を借用によって說明することは不可能である。

とは言え、ポッペ氏の『アルタイ諸語比較文法、第一部比較音韻論』（ウィースバーデン　一九六〇年）の比較例がことごとく無條件に是認されうる、というわけではない。この著者の比較例が借用（借用ならその方向）か否かを深く考え、借用の疑いのあるものは取りのぞき、その出版後において見出された好い比較例をくわえて、現在アルタイストによって愛用されているこの本の改訂再版が要望されている。スーニク編著はこの點、ポッペ著書出現以後のアルタイ學（狹義の）への大きな寄與である。

アンチアルタイストの旗手――と言っても相當の高齡であるが――クローゾン卿が言語年代學（語彙統計學）の立場から、ソ連の言語學界の雜誌「言語學の諸問題」（一九六九、五號）に「アルタイ說を語彙統計學的に檢討する」という論文を發表し、アメリカのスウェデシの基礎語彙表によってトルコ、モンゴル、滿洲語間の共通要素を數えたところ、それらを同系と見なすにはあまりにも少しか共通語が見つからなかった、という議論を述べたが、その後、同じ雜誌（一九七一、三號）にこれに對する反論（「アルタイ說と語彙統計學」）がリーゲティ氏によって發表された。わが國でも言語年代學の日本への導入者服部四郎氏と泉井久之助氏との間に、そ

の公式の服部氏による修正の試みの理論的根據をめぐってはげしいポレミクが「計量國語學」誌上で展開されたが（泉井氏のものは氏の論文集「言語の世界」に採錄）、クローゾン卿、リーゲティ氏との間では、アルタイ諸語親族關係證明に言語年代學が有效か無效かが爭われたのである。今のところ、無效である、という說が有力であるのは當然と言える。

アルタイ說は一擧に確立されそうではないが、悲觀的な見透しではない。朝鮮語や日本語の資料もアルタイ說の確立に貢獻することはたしかである。朝鮮語についてはポリワーノフ、ラムステット、ポッペ氏（「比較アルタイ文法」）、李基文氏らのすぐれた資料があるが、朝鮮語の比較研究は緒についたところである、と言わなければなるまい。また日本語の比較研究について言えば、從來はきわめて不完全な單語比較の域を出なかった程度であるなかで、アメリカのロイ・ミラー氏が『日本語と他のアルタイ諸言語』(Japanese and other Altaic languages シカゴ大學出版部、一九七一）と題するモノグラフを發表したことは注目に値する（筆者によるその書評は Monumenta Nipponica 1972 四號に發表された）。氏は日本語のアルタイ的要素をアルタイ比較言語學の立場から解明しようとしているのは、われわれがこれまで行なって來たところと本質上一致しているが、徹底的にこの問題を追求しようとかまえているところから今後の成果が期待される。氏は以前はイェール大學教授であったが、日本語を研究するにはもっと日本に近い方が有利と考えたせいかワシントン大學（シアトル）に移った（しかし氏の移轉をうながしたもっと重要な動機はポッペ氏がワシントン大學にいるためである。ポッペ氏及びその周圍の人々との協力が得られることが氏をシアトルに定住させたことは疑いえない）。日本語のアルタイ學的研究は單語比較の域を脫して形態比較に進むべきことは言うまでもない。日本語とツングースとの比較研究から將來、興味ある成果が期待される。たとえば、原始ツングース語に對して強調・詠嘆の助詞 *ba/*bə が再構され（その異形 *wa/*wə, *pa/*pə, *ma/*mə）それが對格接辭、時・場所の副詞の形成、詠嘆に用いられるにいたったと見られる一方、原始日本語でも強調・詠嘆の助詞 *ba/*bə が再構され（その異形で後にまで傳わったもの wa, wə, pa, mə）ツングース語とおなじ機能において見出されることは重要とおもう。また、四段活用形式はツングース語の活用形式と密接な關係がある。日本・ツングース共通語として *luk-「靴やきものを）脫ぐ」という動詞ステムが再構される（ヱヴェンキ luk-、ヨウェン nuk-、ウデヘ luktag-、古代日本語 nuk-「脫ぐ」）。そのアオリスト形Ⅰ、Ⅱは次のとおりである。

原始ツングース語　アオリストⅠ　*luk-ra>lukta
　　nukta
　　アオリストⅡ　*luk-rī>luktī
　　nuktī
原始日本語　　アオリストⅠ（未然形）
　　*luk-ra>*nuk-ka>nuka
　　アオリストⅡ（連用形）
　　*luk-rī>nuk-ki>nuki

ラ行變格活用以外の日本語動詞の終止形語尾 -u は *-wu にさかのぼり、これは南ツングース諸語の非人稱形動詞語尾 -wo/-wu と同源と見られる。こんご日本語のアルタイ的部分とツングース語と

の形態比較が進められるとおもう。また朝鮮語と日本語との比較も形態論比較にすすむと思う。ツングース語、朝鮮語、日本語の比較研究はアルタイ學にたいして新しい分野をきりひらくにいたるのではなかろうか。

「アルタイ學」について筆者の目に映ったもの、また筆者の考えていることなどを雑然と述べた。アルタイ比較言語學については現在、G・J・ラムステットの「アルタイ言語學概論」(Einführung in die altaische Sprachwissenschaft) Ⅰ「音韻論」(ヘルシンキ一九五七)、Ⅱ「形態論」(一九五二)、Ⅲ索引(一九六六)、ポッペ氏の「アルタイ諸語比較文法、Ⅰ 音韻論」(ウィースバーデン 一九六〇)、「アルタイ言語學概論」(Introduction to Altaic linguistics) (ウィースバーデン、一九六五) があるが、ポッペ氏の恩師W・コトウィチの「アルタイ諸語研究」(クラコフ 一九五三、ロシア譯モスクワ 一九六二)、「アルタイ諸語の代名詞」(Les pronoms dans les langues altaïques) (クラコフ 一九三六) がきわめて有益であることをのべておきたい。

アルタイ比較言語學に對して日本人學者の貢獻ができる分野はとくに滿洲・ツングース・朝鮮・日本語の比較研究にあると筆者は見ている。

追 記

以上を書きおわった後で、PIACの Newsletter No.7 (April 1972) を書記長のシノール氏(インディアナ大學)から受けとった。この號にはA・N・コーノノフ氏の「ソ連におけるアルタイ言語學概觀」と題する第十四回PIAC(ハンガリー、セゲド市、一九七一年八月)への報告の英譯がのっている。筆者はこの報告をゼゲドで聞いたのであるが、その時はロシア語による口頭發表のため、氏は詳しく報告を讀まなかった。その英譯八ページはソ連のトルコ語研究、モンゴル語研究、ツングース・滿洲語研究を手ぎわよく概括している。拙論はこれを活用できなかったのを殘念におもう。讀者がそれをあわせ讀まれんことを希望する。コーノノフ氏の報告はソ連におけるアルタイ諸語研究が組織的に、計畫的に行なわれていることをよく示している。